ウミウシ、ニトログリセリン

しまむら

通い慣れた建物の三階にある一隅で、目の前の人は何の気なしに話しかけてくる。
「考えてみると、どうしてここにいるのかもよくわかんないね」
わたしときみのことね、と念を押しながら、その人は軽く微笑む。私としては、その笑みの意味の方がよく分からなかった。
聞くたびに興味をそそられてきた問いかけ、私たちの日常を掘り進めて裏返してしまうような魅力的な問いかけは、しかし、今となっては、ただ私の胸をざわつかせただけだった。
この場から離れたい。
それはこの人の言葉に答える責任を放棄したいということだけではなかった。私はこの人と同じ場所にいることが、今や苦痛なのだった。でもこの人は多分、私ほどに気負っていないだろうということも（私にしては珍しく）なんとなくわかっていたから、半ば機械的に、これまでの道のりで学んできた言葉を、ぶしつけに並べてみた。実に覇気のない、模範解答だった。それは確かに私の経験から得た本心を写してはいたけれど、こんな形で言い表したいことじゃなかった。目の前にいる人は言葉を続ける。示し合わせたようなやり取りのあと、その人はこう言った。
「やっぱり、わたしは最終的なところで、言葉というものを信用していないんだと思う」
私もそうだよ。
普段ならそう言ったかもしれないが、すでに随分と疲弊していたので、私はそれらしい相槌を打つにとどめた。

＊＊＊＊＊＊

地上約二千メートルの眺めも、慣れてしまえばどうということもない。というか、わざわざ見たいような景色でもない。地球と違って雲が発生しないこの場所では、遥か遠くの山稜までくっきりと見えるが、木の一本も生えていないごつごつとした藍色の岩肌を見ても面白くもなんともないのだった。むしろ、私が内側から山々を覗き見ているこの宿舎の方が、一見の価値がある巨大構造物だと思う。
交差部分に丸みをもたせたあみだくじ。傍から一望するとそんな風に形容できるかもしれない。都市機能を併せ持った馬鹿でかいこのあみだくじは、どういう建築原理で建てられて

いるのかは専門家ではないのでよく分からないのだが、とにもかくにも地面に厳めしくぶっ刺さっているのだった。

この建物の外装は基本的に3D体でしか見る機会がない。定期便でここに来たときに、一度だけ窓から垣間見たことがあるくらいだ。インパクトは凄いけれども、地球出身の感覚からすればやはり奇妙な外観なので、「感動」という気持ちは特になかった。地球に戻ったガガーリンとは似ても似つかない感覚なのだろうと、ふとどうでもいいことに思考が飛んでいく。

案の定、全然集中できていなかった。

なるたけいつもと同じようなことをして落ち着こうと、部屋から持ってきた本のページを繰ってはみるものの、目が滑ってまともに内容を追うことができないでいる。ぐいっと強めに瞬きをして、気合を入れなおす。入れた途端に、意識が別の方向に広がって散漫になる。さっきからそんなことを繰り返していた。

ニュースというものはいつも急なもので、こっちの予定なんか知ったこっちゃないとばかりに踏み倒してくる。別に、保護者が急病になったとか、どこぞの地域に野良隕石が降ってきて少なからぬ被害が出たとか、そういう類の深刻な話ではない。さっきからどうもソワソワしてしまっているのは、もっと個別具体的で、どこにでもあるような話で、「ニュース」なんて強調するほどのことでもないような、みみっちくてせせこましいアレなのだ。

生活の延長上にあるくせに、私の日常を確かに揺さぶってくるような話題。

ぽん、と肩に柔い質量が当たる。

振り返ると、そこに123がいた。特徴的なニコニコ笑いが今日も顔になじんでいる。服装に対するコメントは、私の美的センスからはとっさに判断を下すことは難しい。

「おまたせしました」

「おー、久しぶり」

気が散ったままに定型的な挨拶をする。とはいえ、意識が123に収斂していく感覚は、振り返ってからすぐに芽生えていた。呼びかけ、応答、つまりは、やりとり。そういうものには、心身を強制的に引き寄せる磁場がある。視界に123という対象がくっきりと浮かび上がり、その分、周囲のあれやこれやの輪郭が滲んで、一様に背景に切り替えられていく。

「何を読んでいたんですか?」

私の手に握られている書籍を指さして123が問いかける。

「あー、これは」

……うーん、なんと言えばいいだろうか。話題のベストセラーではないし、タイトルを伝えたところで、内容がイメージできるものでもない。ジャンルで説明するなら何系だろう?123の出身地域の言葉では確か「化学」という区分を使ってなかったはずだから、えーと。

「……理科系の本かな」

「ほう、あなたにしては珍しい」

「まあ、あまり読まないかな」
「ちょっと見てもいいですか？」
「どうぞどうぞ」
123 がパラパラとページを捲る。大きな眼球が左右に動いて素早く情報をあさっている。
「ああ、Alfred Nobel」
「知ってるんだ」
「最近、知りました。Earth News で名前が出てきたので」
「そうか、そっちでも平和賞は有名だもんね」
さらりと目を通した後に、123 は「ありがとうございました」と本をこちらに返した。
「理科系の本はあまり読まれるイメージがなかったのですが、何か興味があることでも？」
「うーん、興味があるというわけではないんだけど、なんというか、突発的に？　むしろ全然関心のないところに手を出してしまう的な……」
「なるほど、あなたらしいです」
ぷっと吹き出すように 123 が笑った。
「やっぱり？　そういう感じある？」
「あります、あります。あなたは繰り返しを好みますが、ときおりその反復自体を自分から壊しにいきます」
「ひえー、見透かされとる」
いや、自覚なら嫌ってほどあるけどさ。改めて言葉に落とし込まれると、反応に困ってしまう。
123 がくつくつと笑っているのを見て、これまでどれだけ極端な振る舞いを 123 にさらしてしまっただろうかと、やや不安になる。不規則、不安定、不均衡、極端。蓋をしても漏れ出てくる厄介な言動に思い当たることが多いからこそ、繰り返しを好むところがある。規則やマナーで整地して、世間一般のストライクゾーンを狙うのだ。
まあ、それでも当然、暴投の全てをカバーできるわけではない。振れ幅にはむらがありつつも、大なり小なり日常で暴投、というか暴発は発生する。ちょっとつついただけなのに、それまで綺麗にならされた地平がぼかんと弾けて、でこぼこのクレーターに変わり果ててしまう。取り扱いには十分注意しなければならない。わずかな振動で爆発するからな、全く。
とか考えていたら、さっきの「ニュース」をまたしても思い出してしまった。わずかな振動のようなものは、正にそれだ。勝手に揺らさないでほしい。
「とりあえず、行きましょうか」
123 が促す先に、やや遅れて歩き出す。久しぶりに 123 と出かける楽しさと、自分のちゃちなむかつきが入り混じった心情に気圧されながらも、私はしっかりと生活を踏みしめた。

＊＊＊＊＊＊＊

123 が予約を入れてくれていたフロアにはまだ来たことがなかった。地球人にやさしい料理を提供してくれる、というくらいしか前情報を持っていない。しっかりものの 123 に準備を任せてばかりなので、私はほとんど何もしていない。

ポーンと到着の音が鳴って、エレベーターのドアが開くと、開けたフロアは意外にもポップな雰囲気だった。なんというか、昔地球で通っていた雑貨店に似たようなところがある。照明が明るいところとか、カラフルな壁紙とか。

「こっちです」

123 が迷わず進む先には、中華料理店らしい赤と金の店構えが見えた。123 と一緒にその中に入り、四人ほど囲めそうな円席に 123 と座った。テーブルの上には箸の入った筒が置いてあって、それを見た 123 が嬉しそうに顔をほころばせる。

「私、お箸を使って料理を食べたことがないので、練習してきました」

123 は手持ちの派手な色をした鞄から、「マイ箸」らしきものを取り出し、これまた「マイ箸置き」らしきものの上に恭しく乗せた。準備は万端らしい。青みがかった箸置きは、なんらかの動物の形を模したものみたいだが、いかんせん、地球外生物の種類には詳しくない。二本の触覚（ツノかもしれない）が突き出たところなんかは、アレっぽい、ほら、あの。

「なんか、ウミウシみたいな形してる」

「ウミューシとは？」

「地球にいるウネウネした生き物」

「ほほう」

123 が瞬きで検索実行すると、123 と私の間に、どこか懐かしいフォルムの海洋生命体が映し出された。どっちが前後か分かりにくい造形、赤・白・青の特徴的なまだら模様。ホトケウミウシだ。

「へえ、可愛いですねえ」

3D 体を指でぐりぐりと動かしながら、123 は色々な角度からホトケウミウシを眺めまわしていた。私の目線の先に、一瞬、そいつの腹部が見える。まだら模様の背中とは異なり、岩肌と接する部分は、はっとするくらい白かった。

出身地の浅瀬でさんざん目にしたはずのそれ（ら）の、意外な一面だった。水中にもぐるにせよ、水面越しに見るにせよ、結局のところ私はそれ（ら）の一面しか見ていなかったらしい。ただ裏返しにされただけで、私の日常の一部までもが併せてめくりあげられたような感覚にふと陥る。

ホトケウミウシは確実に、何てことのない生活の中の端役だった。出身地に対する郷愁を誘うような象徴的なものでは決してない。それは確実に、私の風景に溶けだしていたもののひとつで、ピントのはっきりしない夥しい要素の内のひとつだった。だからこそ、少し不思議なのだ、めくられるような感触を覚えるのは。

取るに足らないそれに、かすかにでもどきりとするなんて、フツーはないことだ。いや、実のところ、どきりとした瞬間にその理由に気付いてはいる。言葉が後追いでそれにかぶさってきている。

ほら、急なニュースのことだよ。アレだ、アレ。あいつのせいで、素通りしていたものにまで、あることないこと見出して、変な気分になっちゃってるじゃないか。何も考えていなかったことまで意識しちゃって、手足がギクシャクするじゃあ、ないか。

……これは個人的なことなのだが、人と話しているときに、気がそれるとイライラする。数秒意識が外れていた隙に、私たちの前には料理が運ばれてきていた。おそらく異星人のシェフが腕によりをかけて拵えた、アレンジまみれの中華（風）料理。蒸し器の蓋の中には、およそ中華料理らしくない配色の点心があった。毒々しいまでのトリコロール。

「わ、ウミューシみたいです！」

123 が嬉しそうに箸を構える。どうやら色味についてはあまり頓着しないらしい。私はテーブル上の 3D 体をわき目に苦笑した。

「ま、とにかく食べよう食べよう」

そこからは、例によって例のごとく、123 と他愛ない会話を等速で続けたのだった。

＊＊＊＊＊＊

結局のところ、いつもの場所が落ち着くということだ。なんだかんだと言いながらも、私は変わらないものが好きだ。そんなわけで、私たちはいつものバーに来ていた。123 はどちらかと言うと新しい店を開拓していくのが好きらしいのだけれど、一緒に出かけるときは大体私の要望に合わせてくれるのだった。地球のバーは店内が薄暗いのが常だが、こちらのバーは全体的に照明が強いし、色合いも彩度が高い。客のテンションもバーというよりは居酒屋に近い。でも居酒屋よりは騒がしくないので、不思議な雰囲気ではある。

「だからなじめないんですよねえ」

普段は理知的な123 も、アルコールが入って声が少しだけ大きくなっていた。ストローでグラスの氷をカシャカシャかき混ぜながら、123 は続ける。

「『なんのためにそれをやるの？』『予定しているスパンはどれくらい？』『もっといいやり方

があるかもしれないよ』……。そんなのばっかりです！　口には出さなくても暗にそう言っているのが丸分かりですよ。合理性おばけ、目的の権化、有意味の神格化。ああ、嫌だ嫌だ」

「ほうほう」

相槌打つマシーンの私。

「つまりは、クソです」

ビシッと気持ちよく中指を立てて、123 はカクテルをずずっと飲み干した。

「いや実に素晴らしいアジテーションだ」

おどけた拍手で 123 に答える。123 は含み笑いをして、私の横で身を屈める。休み時間にいつも寝ていたクラスメイトみたいな姿勢だ。

「大分回ってきました、alcohol」

「……まあ、元気になるまで呑んだらよろしい……」

「だいぶ元気ですよー。ここ数日で一番元気」

「そりゃあ上々だ」

もごもごと何かつぶやきながら、123 は自分の腕に顔をうずめた。

茶化してはいたが、職場での星人関係が本人的には相当なストレスらしい。聞いている分には、星人関係というか、ここにやってくる星人たちに概して共通する独特の規範的な考えのようなものに対するストレスと言っていいかもしれない。強い目的意識とかそういうものだ。そりゃあ、こんな場所にわざわざやってくる星人なぞ、少なからず同じような考えを志向しているものだが、それがそのままこの場所で生活する星人全てに受けられているわけでは到底ない。少なくとも、私や 123 にとって、そういう目的意識的なものは肌に合わないものだった。

じゃあ、なんで私や 123 はここに来たんだよという話ではあるのだが、私に関しては、そういう成り行きだったとしか言いようがない。あるいは、ここしかなかったと表現することもできる。こんなことを言うと、「そんなことができるのは能力に秀でた一部の星人だけだ」と怒られてしまいそうだが、実際のところそうなのだ。逃げるようにやってくる奴だっているのだ。日常の導火線に火がついて、追い立てられるようにやってくる奴だっているのだ。それまでの生活が続けられなくなってしぶしぶ、あるいは、仕方なく……。まあ、ここにやってくること自体が、生活における暴発のようなものでもあるので、逃げおおせることなど最初からできていないのかもしれないわけだが。

【なじめなかったんですよね、昔から】

いつだったか、123 から今日と同じような話を聞いた。正直なところ、異星の文化規範については、地球人からは上手く想像できないものもあるので、私は 123 が言っていることを何となくしか理解できなかった。それでも、私よりもはるかに言語運用能力に秀でた 123 が、ぽつりぽつりと、何かを確かめるように口から言葉を零している様子は、私自身にも思い当

たる経験があったのだった。だから、私たちはこうしてつるんでいるのだと思う。こうやって、無目的な言動に心身を遊泳させながら、時折、シームレスに悪態をついているのだと思う。改めて確認したことはないけれど、123 のちょっとだけ奥深くで流れているものと、私の中の支流が、どこかのタイミングでぶつかって、私たちはそのまま何となく、同じ流れの中で生活している。きっと、どこかで分流するその流れの速度は、今のところは等速だ。

【考えてみると、どうしてここにいるのかもよくわかんないね】

地球にいた時にそう言われたことを、今やはっきりと思い出していた。あの時も、そして逃げるようにここにやってきてからも、私は、そしておそらくは 123 は、まだずっとよくわからないままなのだ。

私たちは、ただ、日常の微かな振動にすら、こらえきれなくなっただけなのだ。それだけ耐久力がないものだから、こうやって余計なことまで思い出しているし、ホトケウミウシにまで裏返されそうになってしまっている。

「ところで、イオリ」

123 がむくりと起き上がる。無表情で何を考えているのかよくわからない。

「何か嫌なことありました？」

「なんで？」

「……んー、なんとなく？」

「お、123 にしてはアバウトな物言い」

「alcohol のせいですよ、おそらく」

うん、そういうことにしておこう。123 の言い分だってそうだし、私がこれから話すこともそうだ。きっかけがあるならば、別にわざわざ秘しておくようなことでもない。変にためこむから破裂するのだ。123 のガス抜きという文脈に便乗させてもらうことにしよう。

＊＊＊＊＊＊

「えー！　元恋人が同じ職場に！」

こいつ、なんて嬉しそうな顔をしやがる。酒でへばっていた身体がいきなりこちらを向いて、前のめりに続きをうながしていた。

「おうおう、見世モンじゃねえぞ」

ひょろい腕を構えてボクサーの真似などをしてみる。

「ウッ、すみません。そうですよね、本人が一番つらいですよねウフッ」

「もう貴様の愚痴を聞くことはないと思え」

「わー！　すみません、すみません……」
お互いにふざけ倒した後に、カクテルを口に含んで少し気持ちを落ち着かせる。
「……しかし、そうですか。それは災難ですね」
「ひょっとしたらあるかなとは思ったけど、いざそれが現実になるとなかなかクるものはあるね」
「追加しますか、alcohol？」
「んー、そうする」
もうだいぶ酔いが回っていて視界がぼんやりしていたけれど、促されるままに注文する。いや、酔いが回っているからこそ判断力が鈍っているのかもしれない。きっとそういうことだ。
最初こそおどけてはいたが、123 は事の詳細について無理に尋ねようとしてこなかった。ただ、気持ち少しだけ顔をほころばせて、どこを見るでもなく瞬きを繰り返していた。
何と話そうか、と考えようとする中で、頭の中を忙しなく動き回っているのは、どうでもいいはずの事ばかりだ。数刻前まで読んでいた本の内容や、だらだらと続けていた会話のトピック。そういうものがアルコールと場の雰囲気に掻き混ぜられて、何とも言えない酩酊を引き起こしていた。心地よいだけでもなく、気持ち悪いだけでもない。つつき方次第で、どちらにも弾けてしまいそうな、無軌道な空気。そういうものを 123 と共有するたび、私は 123 の底流に脚を浸しているような気分になった。
123 はどうだろうか？
何から話したものか、相変わらずよくわからないので、またしても別の疑問が湧いてきてしまう。それもこれもあれも全部、きっとアルコールのせいなのだった。
互いに口を噤み合いながら、私たちは通奏低音に身を任せて、まるで不似合いな日常を闊歩している。無目的なそれは、いつかは誰か、あるいは何かによって弾き飛ばされるのだろうか？
収縮と発散、連続と断絶、つまりは、ウミウシとニトログリセリン。
何に急かされたのかすらわからないまま、とりあえず私は 123 に語り始めた。

（終）